

2026年（令和8）

年頭にあたつての

ご挨拶・所感

国際善隣協会会長 井出亜夫



明けましておめでとうございます。

昨年は、戦後80年を迎え、戦争、戦後社会を振り返ってさまざまな見解が開陳されました。歴史とは過去を振り返り、現在を評価・分析し、将来を展望するものであるという観点に立てば、こうした折り目における考察は極めて重要なものと考えます。

1943年末に生を受けた私は戦争を直接知りませんが、もの心ついたとき、戦争で父親を失った友人が母親一人の手で育てられている姿を見て同情の念が湧きましたし、満州から引き揚げてきた友人家族の状況、東京から疎開してきた友人が東京に戻っていく姿

を明確に記憶しております。

1964年日本は、一応戦後復興を成し遂げOECDへの加盟、IMF8条国への移行を成し遂げました。1967年は、私が大学を卒業し、当時の通産省に入省したときであります。日本が資本自由化の義務を負い、GATTケネディ・ラウンドが妥結した年でありました。入省時の研修にあたり、S先輩は、日本はいまだ中進国である、これを先進国にするのが君たち世代の役割であると言い、またY先輩は、古来深い関係を有した中国との間に国交がない状態を憂え、日中友好関係樹立の必要性を強く指摘されました。

その後1972年には日中国交正常化がなされましたが、1984年私が最初に訪中した当時、人民服、自転車での通行が印象に残っています。

1989年にはベルリンの壁崩壊、東西冷戦の終結に向かいました。冷戦終結にあたって、米国の政治経済学者の中では、「歴史の終焉―市場経済社会の一般化」「フラット化する社会」などの論が出回りましたが、現実世界の展開では「貧富の格差拡大」、リーマンショックを契機とした「実体経済から遊離した金融の展開」「地球温暖化に伴う気候変動問題」が人類社会に投げかけられ、21世紀の市場経済システムの在り方が問われています（トマ・ピケティ、フィリップ・コトラー、ビル・ゲイツ、宇沢弘文、ムハマド・ユヌスの言説）。

米国の政治・社会状況は、トランプの出現に代表される混乱、世界における威信の低下が明確となっています。他方、中国の台頭、世界政治・社会への影響力増大など大きな変動には眼を見張るものがあります。無論、中国にもさまざまな問題があり、過日骨格が

固められた5か年計画（2026～30年）は今後の中国の在り方を展開していますが、清朝最盛期乾隆帝の時代に中国は世界最先進国であった事実を想起しなければなりません。

国際善隣協会においては、こうした内外の情勢変化を視野にしたさまざまな論稿、講演が特に昨年は活発に行われ、内外に発信されました。ここに、関係者の努力に謝意を表し、今年もいっそうのご協力をお願いいたします。

なお、今年は国際善隣会館の老朽化問題に対し具体的検討を進める時期にあたり、皆さま方のご尽力をお願いする次第です。

昨年9月末、中国より、国家信訪局訪日団（国営企業関係の中国各地若手要人約25名）が訪日され、日本では、各地域の人々の要望をいかに把握し国政に反映しているのか実情を伺いたいとの話があり、私が日本の状況を説明しました（日中科学技術文化センター主催）。同時にこれに関連し古来、日本で知られている儒教、仏教など利益至上主義を否定する以下の東洋思想、

日中両国が共有する民衆重視の思想を紹介しました。

儒教思想・仏教思想などに現れた民衆重視

①「積善余慶／善行を積み重ねた家には、子孫にまで幸福が及ぶ」（『易経』紀元前8世紀頃）。

国家・民族の概念を超える発想

②「楚の共王出獵して、その弓を遺う。左右これを求めんことを請ふ。共王曰く、

「止めよ。楚人弓を遺うも、楚人これを得ん。又なんぞ求めん」。仲尼（孔子）これを聞きて曰く、「惜しいかな、その

大ならざる。また人弓を遺うも人これを得んと曰わんのみ。何ぞ必ずしも楚のみならんや」（前漢・劉向『説苑』^{ぜいえん}）。

国家の安寧は人民の幸福に依存する

③「民を貴しと為し、社稷これに次ぎ、君を軽しと為す」（『孟子』尽心編）。

農民の辛苦に思いをはせた詩

④「誰知盤中飧、粒粒皆辛苦／一体、誰が食器の中のごちそう（の来歴）をわかっていよう。一粒一粒が皆農民の辛苦の賜である」（唐代の詩人政治家・

李紳）。

指導者の心得を説く

⑤「先憂後樂—先天下之憂而憂。後天下之樂而樂／天下の憂いに先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ」（北宋・范仲淹『岳陽樓記』末尾の一節）。

『菜根譚』の心

⑥「以積貨財之心積學問、以求功名之念求道德／貨財を積む心を以て學問を積み、功名を求める念を以て道德を求める（明代末期の書家・洪自誠が著した人生の処世訓を説く隨筆集）。

農民指導者の言葉

⑦「……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……／世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない／自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する／この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか／新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある／（中略）われらは世界のまことの幸福を索ねよう」（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』）。